

## ふたつの歴史

丸山 健夫

定年退職なので研究室を整理した。いざという時のために残しておいた PC98（ピーシーキュウハチ）というパソコンが出てきた。電源スイッチを入れてみた。見事に起動した。

パソコンが日本で普及しはじめた 1980 年代から、パソコンといえばキュウハチとさえいわれるほど、PC98 は日本のスタンダードパソコンだった。

当時のパソコンは、メーカーごとに違う仕様で作られていた。ソフトも、各メーカーの機種専用だった。日本電気 NEC 製のキュウハチ用ソフトは、富士通製のパソコンでは走らなかった。メーカーが最新鋭の技術を競い、オリジナルなパソコンをつくったのだ。

市場を制するキュウハチだから、数多くのソフトがつくられ市販された。その中でもっとも有名だったのは、ワープロソフト「一太郎」だろう。当時、文書作成には、日本語ワードプロセッサという専用の機器が使われた。パソコンとは別の商品という認識で販売されていた。ところが「一太郎」を使えばパソコンで文書作成ができる。ローマ字入力で、かなと漢字の混ざった日本語が実に見事にパソコン画面にあらわれた。「一太郎」は、日本のスタンダードソフトとなった。

ところが、アメリカから黒船がやってくる。アメリカ IBM の日本法人が、DOS/V（ドスブイ）という仕組みを提案する。世界標準となっていた IBM/PC（アイビーエムピーシー）で、日本語が使えるようになった。これなら世界中の人気ソフトが、どのメーカー製のパソコンの上でも走る。そしてドスブイの後継としてあらわれたのが、Windows（ウインドウズ／マイクロソフト）である。この流れの中で日本独自のキュウハチは、過去のものとなっていく。

結局、西洋からみれば漢字という特別な壁があったから、日本流のパソコンが進化できた。だが、世界標準のパソコンで日本語が使えるようになった。黒船に飲まれた。

同じ歴史が、携帯電話の分野でも繰り返された。二十世紀末、日本の電機メーカーは競いあって最新鋭の携帯電話を開発した。世界で初めて携帯電話にカメラを搭載したのも、日本のメーカーだ。その技術力は世界一だった。

だがここでも、アップルという黒船が出現した。iPhone（アイフォーン）が発売されると、瞬く間にスマートフォンが日本を含む世界市場を制圧した。そんな中、日本独自の技術で発達してきたガラケーたちが消えた。チャールズ・ダーウィンが探検し、孤立した生物種が繁栄していたガラパゴス諸島。その島の名前になぞらえて、ガラパゴス携帯つまりガラケーといわれた日本の携帯電話が、またしても黒船にやられた。

パソコンと携帯電話の進化に、日本の電機メーカーと技術者たちの果たした役割は大きい。だが、結局はアメリカの黒船に制圧されてしまった。ふたつの失敗の歴史はトラウマとなり、日本のメーカーを保守的にしてしまう。とがった商品が出なくなった。どこかの国の誰かさんが開発して売れている。その技術を上手に活用することだけに力が注がれるようになった。

日本よ、チャレンジを諦めるな。きっと世界を飲み込む日が来る。そんなフレーズがふと思いつかん。